

平成 2 1 年度病虫害発生予報第 6 号

平成 2 1 年 8 月 6 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要 [参考]

区 分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病(穂いもち)	やや遅い	やや多い
		紋 枯 病	-	やや少ない
		ニカメイガ	平 年 並	少 ない
		セジロウンカ	-	やや少ない
		トビイロウンカ	-	少 ない
		斑点米カメムシ類	-	平 年 並
ダイズ	ダイズ	コブノメイガ	平 年 並	やや少ない
		フタオビコヤガ	-	多 しい
		紫 斑 病	平 年 並	平 年 並
果 樹	ナ シ	ハスモンヨトウ	平 年 並	平 年 並
		カメムシ類	平 年 並	平 年 並
		黒 斑 病	-	やや多い
	カ キ	黒 星 病	-	多 しい
		ハダニ類	-	平年並~やや多い
		シンクイムシ類	平 年 並	平 年 並
果樹共通	うどんこ病	平 年 並	平 年 並	
野 菜	ネ ギ	炭 疽 病	平 年 並	平 年 並
		炭 疽 病	平 年 並	平 年 並
		カキノヘタムシガ	平 年 並	やや多い
		カメムシ類	平 年 並	平 年 並
		軟 腐 病	平 年 並	やや多い
		白 絹 病	平 年 並	やや多い
	ナガイモ	黒 斑 病	平 年 並	平 年 並
		ネギハモグリバエ	平 年 並	平 年 並
		ネギアザミウマ	平 年 並	やや多い
	シ バ	シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並
		炭 疽 病	平 年 並	平 年 並
		ナガイモコガ	平 年 並	平 年 並
キャベツ・ブロッコリー	ハダニ類	平 年 並	平 年 並	
	シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並	
	スジキリヨトウ	平 年 並	平 年 並	
シ バ	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	
	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	
キャベツ・ブロッコリー	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	
	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	
キャベツ・ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平 年 並	平 年 並	
	ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)	平 年 並	平 年 並	

気象予報 (抜粋)

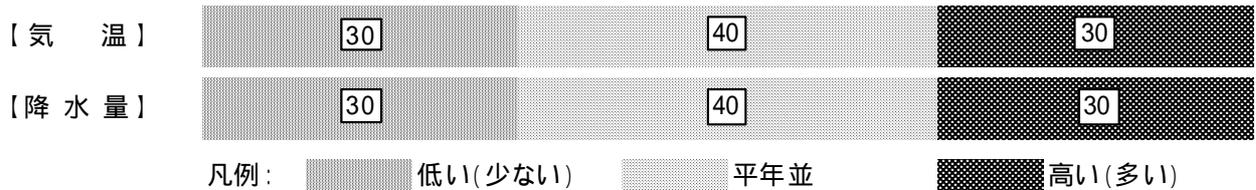
1 か月予報 (8 月 2 日 ~ 9 月 1 日 : 7 月 3 1 日、広島地方气象台発表)

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量などの確率は以下のとおりです。

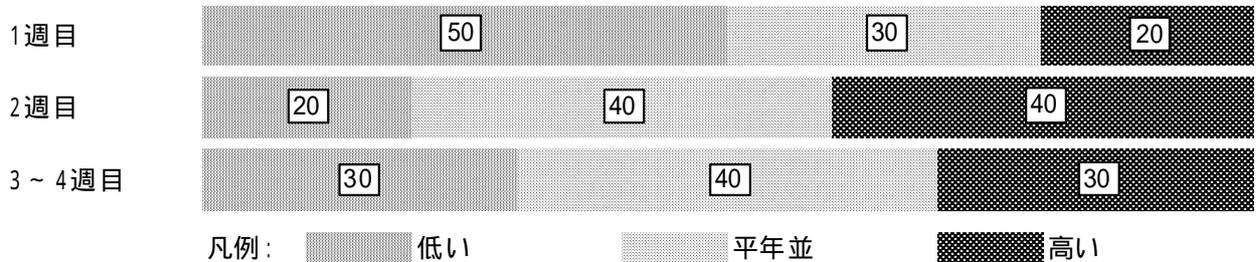
平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

週別の気温は、1 週目は低い確率 5 0 %、2 週目は平年並または高い確率とも 4 0 % です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

【イネ】

1 いもち病(穂いもち)(平成21年8月3日付、病害虫発生予察注意報第3号発表)

(1) 予報の内容

発生地域	中間地～山間地
発生時期	やや遅い
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月31日現在、県全体の葉いもち発生ほ場率は13.2%(平年:34.7%)と平年よりやや少なく、広域発生には至っていない。しかし、中間地～山間地では、一部で多発生ほ場が認められており、今後の発生拡大が予想される。

イ 本県では、本病に弱い「ひとめぼれ」、「コシヒカリ」の栽培面積が約90%を占めている。また、イネの生育は軟弱気味であり、本病に罹病しやすい状態となっている。

ウ プラストム(いもち病発生予察システム)による葉いもちの感染好適日、準感染好適日が7月21日以降、断続的にみられており、葉いもちの発生はさらに増加するものと見込まれる。

エ イネの出穂期は、「ひとめぼれ」、「コシヒカリ」ともにやや遅いと予想されていることから、穂いもちの発生時期はやや遅いと見込まれる。

オ 7月31日発表の向こう1か月の気象予報によると、平年に比べて晴れの日が少なく、1週目の気温も低いと予想されている。したがって、今後もしもち病の発生しやすい気象条件が続くと予想され、穂いもちの多発生が懸念される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第3号を参照。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地ほ場における本病の発生は、平年に比べてやや少ない。
- イ 8月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は、平年に比べてやや少ない。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、平年と同様に、本病の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 出穂期頃までに防除を行う。なお、コシヒカリの防除の目安は、穂ばらみ期の発病株率が18%程度とする。
- イ 病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、農薬登録のある粉剤などにより追加防除を行う。

3 ニカメイガ（第2世代）

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯及びフェロモントラップにおける総誘殺数は平年に比べて少ない。
- イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年に比べて少ない。
- ウ 第1世代幼虫の発育はほぼ平年並である。
- エ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生は少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、8月上旬に心枯茎率1.5%以上又は被害株率10%以上の場合、8月中旬（第2世代幼虫の発生最盛期）に防除を行う。
- イ 近年、一部の地域では発生が増加傾向にあるので、ほ場の発生動向に注意する。

4 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域（特に平坦部）
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯への総誘殺数は平年に比べて少ない。
- イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年に比べてやや少ない。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、農薬登録のある粉剤などを使用して直ちに防除を行う。

5 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	平坦部
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。
- イ 7月下旬現在、県予察ほ場及び巡回調査定点等の現地ほ場での発生は確認されていない。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいいため、各ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。
- イ 8月中旬頃の要防除水準は、成幼虫数1頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、農薬登録のある粉剤などを使用して防除を行う。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月中旬現在、巡回調査定点の水田畦畔及び水田周辺のイネ科雑草地におけるカメムシ類の発生は、平年並であった。
- イ 7月下旬現在、出穂期～穂揃期を迎えた早期田植ほ場、極早生品種栽培ほ場などにおけるカメムシ類の発生は平年並であった。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、水田におけるカメムシ類の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には、7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。とくに、周囲より早く出穂するほ場では、被害が集中する恐れがあるため注意を要する。なお、防除は地域一斉で行うと効果が高い。
- イ イネ科雑草地、畦畔などはカメムシ類の増殖源となる。出穂20日前に草刈りを行ったほ場では、再生したイネ科雑草が穂をつける前に再度草刈りを行う。また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地、畦畔などの草刈りを行っていない場合は、穂揃い期から乳熟初期に草刈りを行い、直ちに薬剤防除する。
- ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の飛来を助長するので直ちに取り除く。
- エ 要防除水準は、出穂後の本田における捕虫網50回振りすくい取り虫数が4頭以上である。

7 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地ほ場における発生は、平年に比べてやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が多いほ場では、飛来次世代の幼虫発生初期(8月中旬頃)に、農薬登録のある粉剤などを散布する。なお、農薬登録のある粒剤で防除する場合は、飛来次世代の発蛾最盛期(8月上旬頃)に散布を行う。

8 フタオビコヤガ(平成21年7月29日付、病害虫発生予察注意報第2号発表)

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域(特に中間地～山間地)
発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年に比べて多かった。

イ 7月以降、本種の発生に好適な気象条件が続いており、発生量が急増している。

ウ 8月第1半旬現在、中間地～山間地では、防除基準に達しているほ場が散見される。

エ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生は引き続き多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第2号を参照。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

開花期の25～30日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる7月第1～6半旬までの総誘殺数は、県予察ほ場(鳥取市橋本)、鳥取市河原町、湯梨浜町の3地点いずれも平年並であった。

イ 若齢幼虫による被害は、平年並の8月第2半旬以降に発生し始めると予想される。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並の発生になると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。

発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺(葉ごとの切除)あるいは粉剤などのスポット散布が有効である。

イ 幼虫が老齢になると薬剤の効果が十分得られないため、早期発見と早期防除に努める。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの予察灯への総誘殺数は平年並である。
- イ 大豆の開花期は平年並となっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は平年並の発生になると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤などを使用して防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬に巡回調査を行った果実の除袋調査の結果によると、県内の平均発病率は、4.3% (平年：4.6%) でほぼ平年並であった。また、新梢葉の平均発病率は2.0% (平年：4.1%) で平年をやや下回った。しかし、一部で発病の多い園が認められている。

イ 7月の降水量及び降雨日数が多く、梅雨明けが平年より15日遅い8月4日となったため、新梢葉への発病の増加が懸念される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液、8月中～下旬にアミスター10フロアブル1,500倍液又はストロビードライフロアブル3,000倍液を散布する。

2 黒星病 (平成21年8月6日付、病害虫発生予察注意報第4号発表)

(1) 予報の内容

発 生 量 多 い

(2) 予報の根拠

病害虫発生予察注意報第4号を参照。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第4号を参照。

3 ハダニ類 (カンザワハダニ, クワオオハダニ, ナミハダニ)

(1) 予報の内容

発 生 量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬に行った巡回調査の結果、クワオオハダニ、カンザワハダニ及びナミハダニの発生量は、全般的に平年並～やや少なかった。

イ 現地ナシ園では、クワオオハダニ及びナミハダニを中心に密度が高く、葉焼け症状が観察されるほ場が認められている。

ウ 7月下旬現在、県予察ほ場におけるクワオオハダニの10葉当たりの雌成虫数は、は0.0頭(平年:0.3頭)とほぼ平年並の発生密度である。

エ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の増殖にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。

また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ クワオオハダニにはダニゲッターフロアブル2,000倍液などを、カンザワハダニ及びナミハダニには前述の剤に加えてマイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数はほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫(第4回成虫)は、平年並の8月下旬頃から増加すると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤はDDVP乳剤50の1,000倍液、アグロスリン水和剤2,000倍液などを使用する。

ウ 裸果(受粉樹に残っている果実など)はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

[カキ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液、8月下旬にストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のカキ園(富有)での発病は、ほぼ平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液、8月下旬にストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

イ 現在、発病の認められている新梢及び果実は、見つけ次第取り除く。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場の予察灯におけるカキノヘタムシガ第1回成虫の総誘殺数はやや多かった。また、7月第6半旬現在、第2回成虫の誘殺数もやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

8月初旬にスミチオン水和剤40の1,200倍液などを散布する。多発園では8月15日頃にアグロスリン水和剤2,000倍液などを追加散布する。

[共通 (ナシ、カキ、リンゴ)]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月22、23日に行ったナシ園における巡回調査の結果、平均被害果率は0%で、カメムシ類による被害は確認されなかった。

イ 7月中旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数は八頭町、河原町及び北栄町で平年並～少ない。湯梨浜町では、予察灯のチャバネアオカメムシ誘殺数は、平年と比較してやや多い。一方、予察灯におけるクサギカメムシの誘殺数は全調査地点でやや少ない～少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の加害活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギが傷つくような無理な土寄せ及び追肥などの作業で発病が助長されるので注意する。

イ 最終土寄せ前にナレート水和剤1,000倍液を散布する。土寄せ後にコサイドDF1,000倍液又はZボルドー500倍液を7~10日間隔で2~3回散布する。

2 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並～やや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、粒剤ではダントツ粒剤6kg/10a株元散布、散布剤ではアグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は境港地区を中心にやや多い。
- イ 県内全般に、被害の多いほ場が散見される。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、粒剤ではダントツ粒剤6kg/10a株元散布、散布剤ではアドマイヤーフロアブル2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ハチハチ乳剤1000倍液、ランネート45DF1,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。
- イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬における、県予察ほ場でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 現地調査ほ場における発生は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。
- イ 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は降雨によって発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。
- イ 8月上旬現在、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。
- ウ 8月の薬剤防除には、ダコニール1000の1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、ジマンダイセン水和剤400~600倍液などを予防散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 7月下旬現在の現地調査ほ場における幼虫の発生量は、平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本虫は、高温乾燥条件及び風通しの悪いほ場で被害が増加するため、早期発見に努める。
- イ 防除薬剤は、アタブロン乳剤2000倍液(ムカゴにも登録あり)、トレボン乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)などを7~10日間隔で2回程度散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧にいう。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので丁寧に散布する。
- イ 防除薬剤は、コテツフロアブル2,000倍液(ムカゴにも登録あり)、コロマイト乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、ニツソランV乳剤1,000~1,500倍液などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並であり、現地調査ほ場における発生は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを使用する。

[シバ]

1 スジキリヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において若齢幼虫による白化葉及び卵塊はみられていない。

イ 現地ほ場におけるフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 卵のふ化直後の8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6～9kg又はオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。

イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における若齢幼虫による被害は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 成虫の発生ピークは、平年並の7月下旬～8月上旬頃と予想される。

イ 8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6～9kg又はオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。

ウ その後も幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏期の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期の防除を徹底する。

- イ キャベツの防除薬剤は、トルネードフロアブル2，000倍液、アタプロン乳剤2，000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1，000倍液などを散布する。

2 ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

（1）予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において幼虫の被害はみられていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や生長点部が食害されるので注意する。

イ 育苗施設では、防虫寒冷紗被覆（網目1.5mm以下が好ましい）を実施し、害虫の侵入を防ぐ。

ウ キャベツの防除薬剤は、BT剤（エスマルクDFの1，000倍液など）、スピノエース顆粒水和剤5，000倍液、トルネードフロアブル2，000倍液などを散布する。

エ ブロッコリーの防除薬剤は、BT剤（チューンアップ顆粒水和剤）の2，000倍液、プリンスフロアブル2，000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所
〒680-1142 鳥取市橋本 260
TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647
E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、8月20日(木)の予定です。